

テストを英語学習の動機に

都築 千絵

立教大学で教え始めた2012年度前期、全学共通カリキュラム英語自由科目であるTOEIC (Test of English for International Communication) 1 (Reading) を担当した。複数いる担当者の1人として、どのような授業だったかを振り返ってみたい。

授業目標

この科目の目標は統一シラバスで「TOEIC600点を取るのに必要なリーディング力を獲得することを目標とする。」となっている。TOEICは満点が990点なので、600点というのは6割強をめざすことになる。土曜日の1時限にもかかわらず定員枠いっぱいの25名が登録し、内訳は2年生15人、3年生8人、4年生2人で7学部にわたっており、英語資格テストに対する学生の関心の高さを感じた。

TOEICはリスニングセクションとリーディングセクションに分かれており、この授業では科目名通り、リーディングセクションの3部分である短文穴埋め問題、長文穴埋め問題、読解問題を扱った。具体的な目標として、TOEICの形式に慣れ、語彙・文法力を伸ばし、速く正確に英文を読み、時間制約のある中で迷わず正解を選ぶ力を伸ばすことを目指した。また、学期中に、この授業をペースメーカーとして学生自身の英語学習の良い勉強習慣をつけ、学期後も続けてほしいということをお願いした。

正規科目としての資格テスト準備科目

大学で単位を出す正規の英語科目として資格テストの準備科目があることは、今ではあまり珍しくはない。むしろ、テストに対する意識の高さを学生の英語力向上に使わない手はない。語学学習はある程度までいくと、自分で自分の力が伸びていることを実感する場面は多くないし、テストがあるから勉強するというのは、学生にとって今までずっとやってきたことなので目標スコアがあることは、勉強をし続ける大きな力になる。

授業初日の学生の自己紹介で、この科目を履修した理由として、受験期に比べて自分の英語のリーディング力が落ちてきている気がしているのので何とかしたい、そして将来に備えてTOEICで少しでも高い点を取りたい、という発言が多くあった。大学の授業である以上、小手先の受験テクニックを教えるのではなく、本当の英語力を身につけさせることに繋がる授業にしなければ、と心がけた。

学生間のレベル差

1年生の必修英語科目では、学生はレベルチェックテストに基づいてレベルごとのクラスに分かれているので、クラス内の英語力の差は小さく抑えられており、教える側はとても助かる。自由科目であるTOEIC 1 (Reading) も前述のように600点を目指すと統一シラバスに記されており、TOEIC 2 (Reading) が目標700点と明記されているので、学生間のレベル差はあまり心配していなかった。

しかし、最初の授業での英語による自己紹介で、英語力の差が大きいことがわかった。また、TOEICというテストについての知識も、すでに何度も受けている学生もいれば、どのような形式かも知らない学生もいた。最初の授業で行ったTOEICのReadingセクションと同形式で問題数を減らしたレベルチェックテストの結果も、学生間の英語力の大きな差を明瞭に示していた。TOEIC 2 (Reading) を履修すべき学生もいれば、600点にはほど遠い学生もいた。この学生間の大きな英語力の差は、学期中を通して、退屈している学生がいないか、あるいは難しくついてこれない学生がいないかと常に気がかりなことになった。

授業での使用言語

最初の数回は、英語で授業を行っていたが、学生からの質問が極端に少ないことや、文法用語など日本語を使用する方が、理解が容易そうだったので、日本語使用に切り替えた。アジアからの留学生も3人いたが、日本語で構わないということだった。教科書も日本の出版社のものを使用したので日本語の説明があり、学生間のレベル差のことを考えても日本語での授業で良かったと思われる。

教科書

教科書は2冊使用した。1冊は授業で使用、もう1冊は授業の復習専用の問題集で、宿題用として毎週回答を提出させ、チェックしてから翌週コメントと解説をつけて返却した。時間制限もなく辞書を使うこともできるので正解率は高く、真面目に取り組んだ学生には自信になったと思う。同じ問題を多数の学生が間違えた場合や、通常満点の学生が間違えた場合には、授業で取り上げた。

授業内容

授業では、学生があらかじめ宿題として解いてきた教科書の問題の答えあわせを行った。学生には、単に正解を言うだけではなく、それを選んだ理由を言わせることを徹底した。クラス全体で答えを確認する前に、ペアで答えあわせをさせた。これは最初からクラス全体の前で自分の答えを言わせると、まず自分の答えを言う前に隣の席の学生に確認してからでないとと言えないという不思議な光景が多く、逆に時間がかかるためであった。また、授業中に時間を決めて問題を解くこともあり、その答えあわせも同様に行なった。

語彙を補う知識

学生は読みにくい固有名詞やわからない単語がでてくると、それを乗り越えて前に読み進めることに時間がかかる。TOEICでは、自分が知っている単語だけしか出てこないことはないかと覚悟し、わからない単語も文脈から想像力や自分の常識を総動員して理解する練習もした。ここで、ビジネス慣習や生活慣習など知識として知っておいてほしいことは、読解問題ででてきたものから説明していった。たとえば、家賃をクレジットカードか小切手で支払ってほしいという不動産家さんからのレターが問題文であった時には、小切手での支払いという仕組みを実際に昔使用していた自分の小切手を見せて説明した。いろいろな知識をもっていると、読解の際に語彙不足を補うことに役立つので、世の中で起きていることに興味を持ち、知識を増やすようにという話もした。

選択肢を減らす

語彙を増やすと同時に、すべての問題

で知らない単語に怯まないことが大事だと学生には意識づけた。TOEIC は、4つの選択肢から1つの正解を選ぶ方式だが、正解がわからなくても、絶対に正解ではありえない選択肢をよけることで正解に近づける。授業では、品詞を強く意識させ、単語を知らなくてもその語形から正解に近づけるような練習をした。

英文速読

TOEIC の Reading セクションは、最後の問題まで時間内に辿りつくには速読がかかせない。そのためには、とにかく文の頭から意味を理解して決して戻って理解しないことを徹底した。また、日本語と英語の速読の練習ができるサイトを授業中に紹介し、目の動きの説明をした。練習まで授業中にする時間がなかったのは悔やまれた。

テスト

前述の宿題として毎回の授業で提出する回答以外に、TOEIC と同じ形式の復習テストを学期中に2回行い、期末テストは Reading セクション全部を範囲にしたテストを行った。復習テストでは、2冊の教科書から類似した問題もたくさん出し、最初からレベル差がある学生でも、しっかり学期中に勉強すれば高い点がとれるようにした。

授業を活性化させる取り組み

答え合わせと正解にいたる課程の確認と説明をしていると、ほとんどの学生は熱心にメモを取っているが、質問が時々出る以外はこちらから一方的に教えこんでいる感じがして、自分としては居心地の悪い空間だった。英語を意味のあるアクティビティで使わせながら身につけさせるという授業形態に慣れているため、

自分だけが長く話すことを避けたかった。言い換えると、テスト準備科目をどのようにアクティブラーニングに持っていけるか、という課題であった。

学期中、その答えとなるアクティビティを1つ取り入れた。それは、学生にテスト問題を自分達で作らせるということだった。具体的には、読解問題に使われる文だけを学生に渡し、ペアでその文に関して設問を3つ作り選択肢を用意させた。同じ文を使っても、ペアによって設問と選択肢が違い、問題作成後お互いの問題を実際に解いてみて、自分たちが作った問題と他のペアが作った問題と、どちらが難しかったかなどの比較をした。すでにできた問題を解くよりも深く問題文を理解する必要があったが、「ひっかけ」用の選択肢を工夫するなど、とても楽しそうにやっていた。これは、Reading セクションの短文穴埋め問題と長文穴埋め問題でもできるので、次回教える際にはもっと取り入れてみようと思う。

自立した学習者をめざして

Reading で何が難しいかと学生に聞くと、知らない単語がたくさんでてきて意味が分からない、と多くの学生が言う。そこで、学期の始めに語彙を増やすために自分がやっていることをまずはペアで話させ、自分のパートナーのやり方をクラスで共有し、お互いのやり方から学び合う機会を作った。私からは、オンラインの英和・和英・英英辞書の使い方の紹介と単語帳には必ずその単語が出てきた文を例文として残すこと、品詞も把握し、使える形で覚えることなどを指導した。この学期中に出てきた単語はすべて理解し自分のものにすることを指示し、学期の終わりに自分で始めたシステムをやり続けているかどうかのチェックをした。

また、学期も終わりに近づいた頃、英語学習に役に立つサイトの紹介をした。Rikkyo English Online やクイズをしながら語彙を増やせるサイトなどを利用し、自分から学び自分の中で勉強のリズムを持ち習慣化させることの大切さを何度も話した。加えて、勉強としてではなく楽しみとして英語を読む習慣もつけてほしく、自分の英語のレベルで選択でき、辞書を使わず読み進められる本も紹介した。

まとめ

履修生 25 名のうち 8 人が、5 月の連休明けあたりから欠席が続きドロップアウトしたのは残念だったが、最後までついてこれた学生は、それぞれ英語学習に関して少しは得るものがあったと思う。反省することは多々あるが、学生間のレベル差が大きいクラスで、英語力の高い学生たちが遠慮してしまうようなことなく、積極的にクラスを引っ張っていけるような仕組みを作れなかったのは残念だった。来年度も同じ科目を教えることが決まっているので、この経験を生かし、ほかの担当者とも意見交換をしながら、学生が主体的にかかわれるようなアクティビティをもっと増やし、楽しみながらリーディング力を高めていけるような授業にしたいと思っている。

つづき ちえ
(本学教育講師)